

【東風】 こち

- ・ 東風吹かば匂ひおこせよ梅の花あるじ無しとて春を忘るな『拾遺集』菅原道真
〔春風が吹いたら匂いを放てよ我が家の梅の花よ、私がいなくとも春を忘れるなよ〕

東風[こち]とは春風のこと。「こち」の「ち」は「し」と同じで風を意味します。「こち」の「こ」は「小」、あるいは「穀」など諸説あります。「こち」は「小風」すなわち柔らかい風、または「穀風」すなわち穀物を育てる春風という意味になるのでしょうか。本は何処かの漁師言葉、農民言葉だったのかも知れませんね。

これを東の風と表記するのは、四方の風向を四季にあてはめた結果です。夏は南風、冬は北風という一般的概念から、春は東風、秋は西風と定めたのです。しかし実際に春風に定まった風向はなく雅語としての性格が強い言葉です。

冒頭の歌の作者、菅原道真(845～903)は宇多天皇、醍醐天皇の信任を得て右大臣、従二位まで出世した頭脳派官僚です。遣唐使の廃止を奏上したことで知られていますね。

無念にも左大臣藤原時平の陰謀により失脚。筑紫国大宰府に左遷され、失意のうちにかの地で没しました。延喜三年二月二十五日のことです。以降、政敵を倒した藤原北家は、一族の繁栄をさらに確固たるものにしました。

道真の生前の有能ぶりは云うまでもなく、活躍は死後もなお続きます。彼の死後、都に流行った疫病、地震、雷火を道真の怨霊の仕業として藤原師輔ら藤原一族は恐れ、必死に鎮魂に努めます。北野天満宮はこのとき道真鎮魂のため建立された神社であることはご存知のとおりです。

怨霊が鎮まった後も道真に関する伝説は尽きません。冒頭の歌に想を得て、道真の館の梅が筑紫国の安楽寺(大宰府天満宮)まで飛んで行ったという飛び梅伝説、道真が宋の怪山に渡り仏鑑禪師に参禅したという渡唐天神の説話、飛び梅を松が追ったという世阿弥作謡曲「老松」など彼にまつわる話が次々と創作されました。

道真を祀った北野天満宮は天正十五年(1587)秀吉の命による北野大茶会の会場となったことはご存知のとおりです。当時は今以上に広い境内だったそうです。茶の湯に少なからぬ縁のある神社ですね。

現在は、御霊信仰を離れ、道真の秀才ぶりから学問の神として信仰を集めていることは皆様ご存知のとおりです。梅の咲く今頃は、合格祈願に多くの受験生が訪れていることでしょう。境内には50種2千本の梅が植えられ参拝者の目を楽しませてくれます。

道真は丑年生れのため境内には牛の銅像が置かれ、牛形の土鈴の土産物が親しまれています。境内には牛の銅像があり、頭部を撫でると頭がよくなるという俗信があります。私も子供の頃、撫でた思い出があります。

2月25日は道真忌です。梅の意匠の茶器などに傘牛香合などを取り合わせれば、道真を偲ぶに十分な取り合わせとなるでしょう。茶杓が銘「東風」では近すぎるでしょうか。